

世界を教育する

— 絡み合うマオリのタトゥー「モコ」と世界の「Tattoo」 —

秦 玲子 (京都大学大学院 人間環境学研究所)

1. はじめに

本論文の目的は、現在復興されているニュージーランド・マオリ（以下、マオリ）の伝統的タトゥー「モコ」の現状を、グローバルな広がりをもつタトゥーとの関わりを通じて考察することにある。

マオリの人々は、1960・70年代からの文化復興運動を経て多くの文化実践を復興させてきた。「モコ」も1980年代・90年代より人々の努力により復興され、現在では、ギャングなどの周縁的な位置づけを与えられてきたタトゥー、またグローバルな広がりをもつタトゥーとは異なる、「マオリ文化」として広く肯定されるものとなっている（秦 2011）。そこでは、ギャングのタトゥーやグローバルな広がりをもつタトゥーは「Tattoo」と呼ばれ、「モコ」とは異なるものとして対置される。

しかし、モコは同時に、常に「Tattoo」と影響を与えあってきた。ニュージーランドで、また世界で、グローバルなタトゥー実践とモコは接触しているのである。今や、モコを彫ろうとするのはマオリの彫師だけではない。非マオリはモコを刻むことができるのか、パケハ（白人）が彫るものはモコなのかという論争がさかんに行われてきた。

モコをめぐる先行研究（Nikora, Rua & Te Awekotuku 2003, 2004, 2007; Te Awekotuku 1997, 2002; Te Awekotuku & Nikora 2007）は、そのマオリの伝統としての側面を強調するあまり、「モコ」と「Tattoo」、マオリの人々と非マオリの人々の関わりと変化を十分に考察してこなかった。こうした課題を克服するため、本稿ではニュージーランド、タウランガを拠点とする若い彫師の団体、モアナ・モコの活動に焦点を当て、むしろ積極的にモコを世界に発信し、非マオリの彫師たちを教育しようとするかれらの試みから、現在の「モコ」と「Tattoo」の接触を考察する。

調査地の概要

本論文は、2009年9月28日から11月26日の予備調査に加え、2010年2月3日から15日・23日から3月9日、6月16日から9月1日・7日から9月16日、11月21日から12月2日の3度のフィールドワークに基づいている。調査地はニュージーランドすべてとしたが、主に北島で行った。

ニュージーランドは、27万534平方キロメートル（日本の約4分の3）の国土面積を持ち¹、2006年時点での人口は418万4600人（2005年の北海道人口562万737人を下回る²）、

¹ 外務省HP (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nz/data.html>) 2010.12.14アクセス

² 総務省統計データ (<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/index.htm>) 2010.12.14アクセス

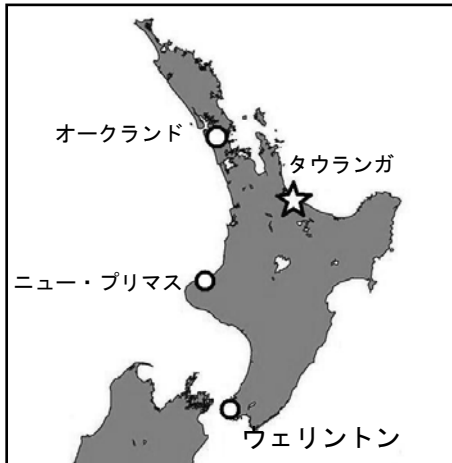


図1 タウランガの位置

そのうち、マオリ人口は62万4300人で約14%を占めている。他のエスニシティでは、中近東が約0.9%、パシフィック・アイランダーが約7%、アジア人が約9%、ヨーロッパ系その他が約77%となり、極めて多様なエスニシティが共存している。また、マオリのうち約87%が北島に居住している³。

本研究で主な事例として取り上げるモアナ・モコは、タウランガ（図1）を中心に活動する若い彫師の集団である。モアナ・モコに関わる調査は、主に2010年11月24日から26日にタウランガで行われたモアナ・モコ主催のファイ（集まり）にて行った。また、11月

27日から29日、ニュー・プリマスにて行われたタトゥー・コンベンション⁴、New Zealand Tattoo and Art Festival中にもインタビューを行った。タウランガは、ニュージーランド北東の海岸部に位置するベイ・オブ・プレンティ地域の中心都市である。マウント・マンガヌイを抱き、美しい海に囲まれた観光地でもある。人口は11万1000人、マオリ人口は16.1%で国全体の平均よりやや多い⁵。

用語の整理

本稿では「皮膚に傷を入れて色素などを注入し、文様や文字を定着させる身体加工」（田川 2009: 173）一般を「タトゥー」と記し、タトゥーを施す人々を「彫師」とした。

また、本稿では、タトゥーを、以下の3つにわけて捉える。まず、モコである。「モコ」が何かとはしばしば論争となる事柄だが、ここでは広く「モコ」と呼ばれているものを「モコ」と呼ぶ。モコを彫ることが「タ・モコ (*Ta moko*)」である⁶。次に、世界的に広がるタトゥーを、「グローバル・タトゥー」とする。最後に、犯罪者やギャング、売春婦といった人々が実践してきたタトゥーである。

人々は、「マオリのモコ」とは対置する形で、犯罪者やギャングのタトゥー、グローバル・タトゥーを「Tattoo」と呼ぶことがある。これらは相互に影響を与えあっており、厳

³ Statistic NZ (<http://wdmzpub01.stats.govt.nz/wds/TableViewer/tableView.aspx>) 2010.12.14アクセス

⁴ 彫師が集まってタトゥーをするイベント。主に入場料を払った客が会場を歩き回り、彫師にタトゥーを彫ってもらう。料金は彫師ごとに異なる。タトゥーを披露し美しさを競うコンペティションなども行われる。

⁵ Tauranga City Council HP (<http://www.tauranga.govt.nz/about-tauranga-city.aspx>) 2011.2.16最終アクセス

⁶ なお、人々の日常生活においてモコとタ・モコという語の区別は明確でない。人々はタ・モコという語をより頻繁に使用する傾向にあるが、これはモコが孫（マオリ語でモコもしくはモコブナ）の意味でより一般的に使用されるためであろう。

密な定義や区別が困難である。そのため、あくまでも人々の言説に基づいたものとして使用するのであり、筆者の判断による区別ではないことを強調しておきたい⁷。

2. 「Tattoo」と「モコ」

モコの復興と「Tattoo」

モコは、ヨーロッパ人との接触以前からマオリの世界観や社会と密接な関係を持って行われていた。しかし、18・19世紀のヨーロッパ人との接触、第二次世界大戦後のマオリの都市化などの社会変動を経て衰退、20世紀半ばに実践が断絶した。

詳細は拙論（秦 2011）に詳しいが、断絶後、タトゥー実践はギャングやマオリ活動家、グローバル・タトゥー出身の彫師に担われ、周縁的な位置づけを与えられることとなった。これを「マオリ文化」としてより肯定されるものとしたのは、1990年前後に登場した、木彫や視覚芸術など他のマオリ芸術出身の彫師たちであった。2000年代にはモコ復興は更なる加速を見せ、現在ではより多くの人々がモコをまどっている。このようなモコ復興は、マオリの「モコ」を、ギャングのタトゥーやグローバル・タトゥーといった非マオリの「Tattoo」とは異なる文化的実践として人々に認めさせていく過程であった。また、マオリ社会という視点で見れば、マオリに付与された犯罪やアルコールといったイメージを払拭し、より主流社会に肯定されるものとしてマオリ及びマオリ文化を主張していく過程であったと言える。

現在、モコの彫師たちは「Tattoo」とモコの違いを以下のように語る。そこで顕著なのは、「Tattoo」は商業的であり、ファッション、飾りに過ぎず意味を持たないが、「モコ」は意味をもつという語りである。そして、その意味は、モコをまどう人間のファカパパ（系譜、祖先とのつながり）を通じてもたらされるとされる。

（モコとTattooは）完全に違う。俺たちにとって、Tattooとモコの違いの主な要素は、Stuがマラエ（集会所）で言ったように、モコはその人物の（肌の）上に刻まれた、生活（life）、生き方（living）だということ。それに、系譜（genealogy）、俺たち（マオリ）にとっての「ファカパパ」（系譜）という点でもモコはTattooと異なる。モコは何かを（祖先から）受け継いでいなくてはならない。ファカパパがモコをつくる。系譜、それをまどう人物の系譜が。命（life force）、生き方がそこにあるから。Tattooingは、Tシャツを着るようなもんだ。ただかっこいいだけ。ストーリーを語らない。俺たちは、Tattooにはマウリ（命、生のエッセンス）が入ってないという。これが俺にとっての大きな違いだ。つまり、モコは生活であり、家系（family tree）、系譜、ファカパパをもつ。Tattooは美しくなるために、ただ肌に刻むものだ。（Q

⁷ マオリ語については、論文中ではカタカナ表記としたが、長母音と短母音は区別していない。ただし、文献名に関しては、その文献に従った。インフォーマントの名前は、基本的には本名もしくはニックネームで表記し、語りを引用する場合には、括弧で名前とインタビューの日付を記した。

2010.11.26)

この(モコという独自の)言語は、一つ一つのものが意味をもっている。(略) デザインが物語を語るの。身体、物質的な意味での身体によって、マオリ世界全体とあなたとの関係を作る。あなたの存在を作ったもの、あなた以前のすでに亡くなった人々や、彫刻、編み物(といったマオリ芸術・文化)と、あなたをつなぐ。

(モコの場合には)人々は「これがデザインだからいれて」と言うわけじゃない。Tattoo shopで起きるのはそういうこと。Tattoo shopでは、「私は花が好きだから、それを入れてくれる？」みたいに。わかる？ プロセスなの。(Tattoo)アーティストは、こういう意味では道具を持っている人というだけ。かれらは素晴らしい描き手だし、どうやって肌に入れるかを知っている。でもかれらは、意味を込めることはしない。図柄がそこにあって、もしくは図柄を描いて、ただそれをいれるだけ。マオリにとっては、(タ・モコは)象徴的な言語なのよ。(Julie 2010.06.21)

「パケハ(白人)」が刻むマオリの「モコ」？

このように対置される一方、モコはグローバル・タトゥーと常に影響を与えあってきた。復興の過程において、モコの彫師たちは様々な技術をグローバル・タトゥーから取り込んだ。また、グローバル・タトゥーからみれば、その伝統や意味性に深い敬意を払いながらも、モコは世界に広がるタトゥーの一種である。今や、モコを彫ろうとするのはマオリの彫師だけではない。世界中の彫師たちが、モコの伝統や美しさに惹かれ、興味を寄せているのだ。こうした中、マオリの彫師の多くは、非マオリの彫師がモコを彫ることに否定的である。

【事例】Julie

Julieは、マオリではない人々がタ・モコをすることをどう思うかという著者の質問に対し、以下のように答えた。この回答は完全にパケハ(白人)を意識したものである。

パケハ(白人)が(モコを学びに)くるのはとても簡単よ。かれらは本当に(モコを)したいと思っているし、本当にいい学び手かもしれない。だけど、かれらは、社会的な歴史(social history)を持っていない。特権的な歴史(privileged history)を持っているのよ。かれらは、社会の支配的な文化の一部だった。(略)私はかれらには教えない。(Julie 2010.06.21)

しかし、モコを彫ろうとする「かれら」を批判する以上に何か対策をとるのは非常に難しいのも事実である。ニュージーランドという国の中、マオリの彫師たちは世界の動向に

手をこまねいて見ているしかない。

3. 「世界を教育する」—モアナ・モコの取り組み

こうした中、若い彫師たちの集団「モアナ・モコ」は、グローバル・タトゥーにむしろ積極的に働きかけ、モコを世界に発信しようとしている。その一環としてかれらが主催したのが、2010年11月24日から26日、タウランガでのファイ(集まり)である⁸。これは、27日から28日、ニュー・プリマスで開催されるNew Zealand Tattoo and Art Festivalに世界各国から参加する彫師を主な対象に、モコについて語り、教育することを目的としたものであった。

このイベントは、モコと「Tattoo」、パケハとマオリの接触を考察する興味深い事例である。というのも、このイベントを通じて、現在のモコの在り方やグローバル・タトゥーとの関わりに関するモアナ・モコの姿勢が明らかになっただけでなく、ホストとゲストの双方に変化が観察されたからである。その変化の背景には、マオリの彫師と非マオリの彫師たちの間に生まれた親密な関係があった。

モアナ・モコ

モアナ・モコは、タウランガを拠点とする若い彫師たちの団体である。中心メンバーは、20代後半から30代前半の5人の彫師、Stu、Pohe、Q、Rikirau、Karemで、さらに3人の見習いがいる。スタジオを所有するが、すべての彫師がフルタイムでタトゥーをしているわけではなく、Qは小学校の教師でもある。中心メンバーの5人はいずれも大学教育を受けており、タ・モコのキャリアは10年以上である。

モアナ・モコの彫師たちは、決して「モコ」が「Tattoo」の一部だと考えているわけではない。かれらは両者を厳然と区別し、自らを「Ta Moko Artist」と自称している。

デザインにアイデンティティやその人のストーリーがなければ、それは俺にとっては「Tattoo」だ。俺たちは、モコを通じて、その人のストーリー、その人が語りたストーリーと、その人物をつなぐ。だから、俺たちはStory tellerなんだ。もしストーリーがなければ、それは、道具が伝統的であろうと近代的であろうと関係がない。それは「Tattoo」だ。それは肌に刻まれたマオリ・デザインだ。(Karem 2010.11.27)

また、グローバル・タトゥーからの技術の取り入れについて質問した筆者に、QとKaremは以下のように語った。

筆者：Tattooの技術に興味があるの？

⁸ このファイに加え、かれらは2010年より海外のタトゥー・コンベンションにも積極的に参加を始めた。

Q: ああ、うん。ただ……わかるかい？ 俺はTattooに興味があるんじゃない。俺たちとTattooはなんの関係もない。ただ、完全にモコだけだ (Just strictly moko)。

Karem: 俺たちがTattooからとり入れるものは一つ、かれらが使う技術だ。マシンそのものについての技術に関する知識。だって、マシンはそこから来たんだから。ヨーロッパのマシンだから、もちろん、かれらの方が技術的な使い方をもっと知っている。それが、俺たちがTattooから取り入れて使いたいもの、モコに持ち込みたいものだ。(モコを) よりよく変えるため、現代的 (Contemporary) にするために。

Q: Tattooは美しい。美しい。だけど、俺はモコをもっと美しいと思う。でも、それは違う話だろう。気にしない。2つの別のものだ。今日ここ (New Zealand Tattoo and Art Festival) にはたくさんの人がいる。モコをするTattooistがいるが、それは俺たちにとってはただのTattooだ。俺たちは、Tattooはしない。モコをする。
(Q, Karem 2010.11.27)

ファイの目的——「世界を教育する」

2010年に行われたファイは、かれらにとって初めて、海外からゲストを迎えるイベントであった。その目的は、海外の「Tattooist」たちにモコについての正しい知識を与えるとともに、その価値を認めさせることであった。KaremとQは、著者との会話の中で、ファイの目的について、複雑な感情を示しながら、以下のように述べている。

(非マオリの彫師がモコやマオリ・パタンを彫るのは) 避けられないことだろ？ 今、世界で起こっていることだ。俺たちが何をするかに関わらず、起こること。だから、俺たちが今すべき最善のことは、出来る限りかれらに情報を与えること。でも、多分、一度に全部、というんじゃない。知識を盗まないか、価値を認め (appreciate) ているか確かめて。(略) 個人的には、今、白人が俺たちの芸術をしているのを見ると心が痛む。なぜって、かれらはデザインや文化の歴史やコンセプト全体を見ることはできないから。かれらが結婚して (マオリの) 家族になり、毎日生活を共にしない限り。
(Karem 2010.11.27)

Q: かれらに情報を与えて、教育する (educate) んだ。

Karem: そう、教育する。だって、俺たちは、世界中の人がシンボルを使うのを止めることはできない。それは避けられないこと (inevitable) だ。だから、きちんと使わないなら、情報を与える。そうすれば、俺たちのデザインや伝統、慣習や宝物を知るだろう。そうすれば乱用しない。(Karem, Q 2010.11.27)

かれらは、避けられない現状を見つめながら、モコを世界に発信し、世界を教育しようとしているのである。

ファイの内容——自然と文化、人々

こうした目的のため、かれらは何をどのように伝え、人々を教育しようとしたのだろうか。実際に行われた内容からは、モアナ・モコの彫師たちが「モコ」をいかに認識しているのかを考察することができる。内容の詳細は、参考資料として巻末に付した。山や海水を使用したプール、滝などの地域の自然に触れ、また地元の小学校を訪れてカパ・ハカ（ダンス）を見たり、マオリの伝統料理ハンギを作ったりした。

イベント中、海外からやってきた著者を含む6人のゲストと、モアナ・モコの彫師、その家族の一部はマラエ（集会所）に宿泊し、寝食を共にした。ポフィリ（迎えの儀式）が行われた後、Stuは、ゲストはすでに「家族」であり、一つの部屋で眠ること、食事の準備や片付けも行ってほしいことをゲストに語った。そして、実際にゲストの彫師たちは食事の片づけなどに参加した。そうした生活のすべてを共有したのである。

ホストとなったのは、モアナ・モコの彫師たちの他、その家族や友人たちである。特に、Aunty Taniaは彫師たちの母ともおばとも言える存在であり、食事の準備や片付けに気を配るとともに、マラエ（集会所）に宿泊、大きな存在感を發揮した。ゲストの彫師たちと親しく言葉を交わし、その後のTattoo and Art Festivalにも参加している。ゲストは、著者の他、アメリカから来た彫師2人とタトゥー・コレクター⁹1人、イギリス人の彫師1人、イギリス出身で現在はオーストラリアに住む彫師1人の5人である。ゲストについては、表1にまとめた。なお、参加費用はNZ\$800（日本円で5万円程度）である。

表1 モアナ・モコのファイ参加者（ゲスト）

名	性別	年齢	出身地	
Big Ben	男性	20代	イギリス	彫師
Ben	男性	30代	USA	彫師
George	男性	40代	USA在住（プエルトリコ出身）	タトゥー・コレクター
Claire	女性	20代	オーストラリア在住（イギリス出身）	彫師
Jen	女性	30代	USA	彫師

ゲストの多くは、イベントの内容について、主にモコそのものについて語る場と考えて参加していたようであり、著者自身そう考えていた。しかし、実際にモアナ・モコの彫師たちがイベントを通じて強調したものは、タウランガの自然と自分たちとのつながり（山

⁹ タトゥーを自身の身体に集める人々。彼の身体は、様々な場所で様々な彫師により行われたタトゥーで埋め尽くされていた。

や滝といった聖なる場所へのハイキング)、マオリ文化(マオリの儀礼や子供たちによるダンス、伝統的な食事ハンギ)であった。ヒコイ(ハイキング)の最中にもモコに関する会話がゲスト・ホスト間で行われたが、「この植物はこのモチーフのもととなっている」といったこと、「モコはこの自然と結びついている」ことが説明された。その他、マオリの伝説についての会話が多くみられた。

最終夜にはモコの 패턴について、ワークショップが行われた。ここでは、ゲストの質問に対応する形で紙に 패턴とその意味が書かれて説明されたが、これは早々に切り上げられ、Stuが顔へのタ・モコを行った。しかし、ゲストの半数は長旅と2日間のハードスケジュールに疲れ切り、それをほとんど見ずに寝てしまったのである。6人のゲストのうち、深夜に及ぶタトゥーを最後まで見ていたのは筆者と2人の彫師のみであった。

モアナ・モコの彫師たちの意図が、マオリ文化を説明することにあつたのは明らかである。かれらにとって、モコはマオリ文化全体と切り離すことのできないものであり、文化を説明することは、モコを説明することだったのである。

(海外の人にモコを理解してもらうには)まずかれらはこの国に来なくてはならない。俺は海外で人々に教えようとしたことがあるが、それはとても難しかった。なぜって、人々がいないから。こんな家、こんな大きな家にいるわけじゃない。彫刻や、壁にかかった祖先の写真を見るができない。俺たちは、それがモコのもっとも重要な(vital)部分だと思っているんだ。モコを理解する前に、それを理解しなくてはならない(Stu 2010.11.27)。

モアナ・モコの彫師たちは、驚くほどオープンに、かれらの知識を語った。Stuは、モコの pattern についてのワークショップにおいて、彫師たちに「質問をしてくれ」と促し、ゲストからのすべての質問に答えたのであった。イベントを通して、秘匿しようとする意図はホストの彫師全員にまったく見られなかった。「俺たちは、教えることの重要性、情報を普及させることの重要性を知っている。それが、きちんと俺たちの装飾(marking)を本当に理解する唯一の方法だ。もしパズルの一部を俺たちが出し惜しめば、かれらは決してそれを完全に理解することができない。」(Stu 2010.11.27)という言葉も、かれらは実践したのである。

さらに、かれらは、自らの意図についても驚くほどあけすけに、ゲストたちに述べている。以下は、モコについて説明する中で、Stuがゲストたち全員に向けて語った言葉である。

今、俺たちの装飾(Marking)の乱用(misappropriation)は世界中で起こっている。これが私たちにとっては辛いことだ。ママエ(痛い)。痛いんだ。でも、俺たちは君たちが(モコを)始められるように教育する(educate)。教える(teach)。(略)学

んだら、君はStory tellerになれる。物語を語るができるようになる。きちんとできるようになる¹⁰。そうすれば、他の人の目も、君たちが開くことができるだろ？
(Stu 2010.11.25)

絡み合う「Tattoo」と「モコ」

ゲストたちは、イベント後、筆者のインタビューに対して以下のように語っている。

ここにいる人々との間にできたつながり (bind) が (最も心に残った)。どの瞬間というわけではないが、人々とのつながり、人々が尊敬して受け入れてくれたことがとても大事。家に招いて、家族の一部として扱ってくれた。それが最も僕にとって意義がある。この週末には、とっても素晴らしい瞬間がたくさんあった。家、そして聖なる場所に迎えてくれたことが、最高に意味がある。わかるかい？ 尊敬して憧れている人に尊敬してもらえたことに、意味があるんだ。(George 2010.11.26)

ある意味……自分が想像していたのとは違った。(著者:どう違ったの?) なんて言えればいいか……。わからない、だけど、僕の(モコという)タトゥー自体への先入観はとてつねへんでこだった(Ugly)。わかる? なぜって……ある意味とても怠惰で……僕はたいして本を読んで(勉強して)いたわけではないし。だから知識が限られている。いつも思い出すのは、マオリの絵とか……。 (モコについて) 美術的に優れているとは思っていたけど、それ以上考えたことはなかった。(著者:意味について?) うん、その背後にある意味について。だから、ここに来て、本当に目を見開いて、耳を研ぎ澄まして。(略) (著者:このフィを通して何か変わった?) うん。明らかに、僕はこのスタイルのタトゥーがどういうものかという見識を得た。その働き、ルール、その背後にある考えについて。それで僕の考えはとてつね変わったよ。(Big Ben 2010.11.26)

かれらの多くは、「マオリ」に初めて触れ、マオリのモコとマオリの自然、世界観とのつながりを感じ取ったのであった¹¹。

¹⁰ ただし、ゲストたちが必ずしもモコの文様を自身のタトゥー実践にとりいれようとしていたわけではない。ゲストの多くは、筆者のインタビューに対し、図柄の面でモコを取り入れることはないだろうと語った。

¹¹ もうひとつ、筆者が体験した事例について記しておきたい。これは筆者の体験であるとともに、Claireと彼女の友人であり、ニュージーランドで仕事をするドイツ出身の男性彫師Bが体験したことである。かれらはこの体験を通じて、マオリの「スピリチュアル」な世界を感じたに違いないと考えるため、この経験を記しておきたい。27日夜、Claireがオーストラリアに帰国する前日、ClaireはStuからタトゥーを入れてもらった。その施術が深夜2時ごろに終了すると、Stuが施術に使用した紙や新聞紙を持って庭に出てゆく。2人の彫師とともに、筆者はStuに従った。靴を履く間もなく、裸足に夜露が冷たく、石が痛い。外は星空である。Stuは、庭に掘ってあった穴に

また、このイベントを通じて生まれたのは、何よりも、彫師間での親しみであったといえる。寝食を共にし、山や滝、プールを訪れる中で、かれらは互いを知り、親しくなっていた。特に、ClaireとBig Benはマオリの人々に愛される存在であった。「(Big) Benはマオリと同じワイリア（魂）を持っている」とAunty Taniaはつぶやいたことがある。

この新しく生まれた人間関係は、タトゥーの交換に明らかである。この3日間のイベント、そしてそこで生まれた関係が肌に刻まれたと言えるかもしれない。

Big Benは、ファイ最終夜、Stuが顔へのモコを彫る間、モアナ・モコの彫師Qの手首にタトゥーをした。Big Benは、タトゥー・ガンではなく、タトゥーの針を割り箸につけ手で動かすという、独自の方法でタトゥーを行う。彼のタトゥーにホストの人々は魅了され、「次回は私も」とつぶやいていた。Aunty Taniaは「私も彫ってほしい」と熱望しており、ニュー・プリマスのNew Zealand Tattoo and Art Festival会場でも「(Big) Benを捕まえずなくちゃ」と言い続けるほどであった。Big Benにはコンベンションで多くの客がつき、それを見るたびにAunty Taniaは「(Big) Benは忙しい」と落胆の表情を見せるのだった。そして、ついに2日目の夜、Big Benを捕まえたAunty Taniaは手首に羽根のタトゥーを入れてもらった。

また、Stuは、ニュー・プリマスの滞在先でClaireの手首にタトゥーを行った。Big Benもモコを入れたいと語っていたが、彼が多くの客を得たため、コンベンション会期中には実現しなかった。しかし、Big Benは、このニュージーランド滞在中にタウランガをもう一度訪ねるだろう、次に訪れた際には「何か起こるかも」と著者に語っている。

アメリカからやってきたタトゥー・コレクターのGeorgeも、モアナ・モコの彫師Poheからタトゥー・コンベンション会場でモコを入れてもらっている。Georgeにモコを入れたことについて、Poheは以下のように語った。

俺は昨日（タトゥーをしながらずっと一緒にいてGeorgeと）ゆっくり話せただろう。それもよかった。話しているうちに、彼は、自分がどこから来たのかについて話し始めた。プエルトリコの話（Georgeはプエルトリコ生まれ）。「実は、プエルトリコのインディアンの血が自分にも入っている」と。「ああ、君もindigenousじゃない

紙を入れ、燃やし始めた。「火の儀式だ」。うずくまり、火に紙をくべ続けながら、傍に立つ彫師2人と筆者に向かって、Stuは儀式の意味を説明する。昔はタトゥーに使った紙を捨てていたが、妻が悪夢を見始める。施術に使用する紙は血を拭うため聖なるものであり、これを大地に返す必要がある。数年前、こうして紙を燃やし始めると、妻の悪夢はおわった、と。低い声で話し続けるStuの顔が、火にゆらめいている。そして、その顔にはモコが刻まれている。モコをまとったStuは、別世界から来た神のようであり、絵画に描かれたマオリ戦士のものであった。儀式の意味を説明し終わると、Stuは一人ひとりに感謝の言葉を述べ、火は消された。「自分たちは、こうしたこと（マオリの文化）に大きなエネルギーを割いてきた。だから技術は高くない。今でも技術を学んでいる」とStuは言う。それに対して、Bは「自分たちは技術は持っているが、意味を探している。同じことだ。」と言った。Bにとって、これはとても「面白い体験（interesting experience）」として心に残ったようである。

か」(と俺は言った)。彼は、アイデンティティを探し求めているんだ。(Pohe 2010.11.28)

このように、ファイを通じて育まれた人間関係は、タトゥーの交換によって肌に刻まれることになった。そして、またこの施術によって、かれらの関係はさらに深まったのである。

さらに、こうした人間関係の構築によって、マオリの人々の側にも「Tattoo」についての意識の変化が明らかであった。モアナ・モコの彫師たちやその家族は、イベントを通じて、ゲストたちの体に刻まれたタトゥーを目にする。Claireの肌にあざやかに刻まれたタトゥーは多くの人々を魅了し、彼女は人々に見せるために度々服を持ち上げることになった。写真を撮らせてほしいと頼む人もいた。あるホスト側の女性は、「私たちが話すのは、常にモコのことだった。だけど、今は『Tattoo』がほしい。」と筆者に語った。Aunty Taniaは実際に「Tattoo」を刻んだが、他の人々も「次回は私も」とBig BenやClaireに言うのだった。

かれらにとって、「Tattoo」とモコは、決して同じものではない。しかし、「Tattoo」への否定的な見方は、たしかに変化したのであった。

4. おわりに

現在、ニュージーランド国内で、また世界で、マオリの「モコ」と「Tattoo」は接触している。パケハがモコを彫ることに、多くのマオリの彫師たちは批判的である。しかし、多くの場合、人々は世界中でマオリのパタンが使用されることを、手をこまねいてみているしかない。本論では、そうした中、現状を見つめながら「世界を教育する」という目標をもち活動するモアナ・モコのファイ(集まり)を取り上げた。そこでは、「モコ」と「Tattoo」、マオリと非マオリは出会い、関係を築きながら影響を与えあい、変化している。

参考文献

- 田川 とも子 2009 「文身とタトゥー」成実弘至(編)『コスプレする社会』、pp.172-195、せりか書房。
- 秦 玲子 2011 「ニュージーランド・マオリのタトゥー、モコの断絶と復興——彫師の語りを中心に——」『日本ニュージーランド学会誌(18巻)』: 53-66
- NIKORA, Linda Waimarie, Mohi RUA & Ngahua TE AWEKOTUKU 2003 Cultural Tattoos: Meanings, Descriptors, and Attributions. In *University of Waikato, Proceedings of a symposium hosted by the Māori & Psychology Research Unit at the University of Waikato*, Hamilton, pp.129-132.
- 2004 Wearing Moko: Maori Facial Marking in Today's World. In THOMAS, N, A Cole & B Douglas (eds.), *Tattoo: Bodies, Art and Exchange in the Pacific and*

- the West*. pp. 191-203. London. Reaktion Books.
- 2007 Renewal and Resistance: Moko in Contemporary *New Zealand*. *Journal of Community & Applied Social Psychology* 17(6): 477-489.
- TE AWEKOTUKU, Ngahuaia 1997 Ta Moko: Maori Tattoo In *Auckland Art Gallery, Goldie*. pp. 109-114. Auckland. David Bateman
- 2002 Ta Moko: Culture, body modification, and the psychology of identity In *University of Waikato, Proceedings of a symposium hosted by the Māori & Psychology Research Unit at the University of Waikato*, Hamilton. pp. 123-127.
- TE AWEKOTUKU, Ngahuaia & Linda Waimarie NIKORA 2007 *Mau Moko : the world of Māori tattoo*. London. Penguin Viking

参考資料：モアナ・モコによるファイの内容

【1日目】

ゲストたちはめいめい到着（ほとんどは当日海外から到着）

- 14:00ごろ マラエ（集会所）前に集まる
ポフィリ（迎えの儀式）の説明
- 14:45 ポフィリ（迎えの儀式）
- 15:10 軽食を食べながら会話
- 15:45 ポフィリやマラエ、今後の予定について説明
ゲストとホストの自己紹介
- 17:30 マウンガヌイ山へのヒコイ（ハイキング）へ出発
- 18:00 登山開始
道中、様々な植物や土地に基づいた伝説が説明される
- 20:00 夕食（浜辺でバーベキュー）
- 21:00ごろ 海水を使った地元のプールへ
それぞれのタトゥーを見せ合いながら談笑する
- 22:15ごろ マラエへ向かう
- 23:00ごろ マラエ（集会所）の構造とマオリ芸術についてのレクチャー
- 23:30 お茶
- 24:00ごろ 終了、それぞれ就寝

【2日目】

起床

7:30 朝食、出発準備

8:30ごろ マラエを出発

- 9:05 ワカ (伝統的カヌー) を見に海へ
- 10:20 モアナ・モコのスタジオへ
モコの起源譚の説明
StuがマオリTVの取材を受けており、ゲスト2人がインタビューを受ける
- 11:05 スタジオを出発
- 11:20 クラ・カウパパ (マオリ語のみで教育を行う小学校) へ
子供たちによるポフィリ (迎いの儀式)、カパ・ハカ (ダンス)
- 12:40 近くのマラエ (集会所) を訪れる
- 13:15 昼食 (フィッシュ・アンド・チップス)
できあがりを待つ間、近くの戦闘用カヌーを見に行く
- 14:10 マラエへ
ゲスト・ホストの男性たちが一緒にハンギ (マオリの伝統料理) を地中に埋める
ハラケケ (ニュージーランド麻) を使用した編み物のワークショップ
- 17:05 滝 (聖なる場所とされる) に向かい、泳ぐ
- 18:40 マラエに帰り、食事 (ハンギ) を準備
食事
片付け
- 21:00 終了
モコについてのワークショップ
パタンなどについて説明
- 22:30 Stuが2人に顔へのタ・モコ
子供たちが寝ていたり、家族が話していたりする。ゲストの一部は就寝。
Big BenがQにタトゥー
- 2:30ごろ StuもBig Benもタトゥーを終了
人々は談笑を続ける

【3日目】

- 7時ごろ 食事、片付け
出発準備ができたゲストたちは、出発を待ちながら談笑
連絡先、カードの交換
- 12:30ごろ 別れの儀式
- 13:00ごろ ニュー・プリマスへむけて出発